

## 編集後記

挾間史談会は、ほぼ毎月開催される定例会で二件程度の会員による研究発表があります。会員は市内は勿論のこと、大分市や遠くは杵築市や別府市から会場の挾間みらい館までやって来ます。発表の内容は戦国時代以降の豊後の歴史が中心ですがどれも労作であり、皆さん熱心に意見交換します。また、発表内容の多くは「挾間史談」に掲載されます。貴重な研究成果をこの機関誌に遺していくことは大変意義あることだと思います。

今回、早いもので「挾間史談」も五号を発刊することになりました。投稿頂いた会員皆様に敬意を表します。そして、更に会員が増えることを期待しています。

☆☆☆☆☆☆

このページをお借りして史談会の行事の一つを報告します。

毎年恒例となった県下各地の歴史をたどる研修ツアーですが、二〇一五年は春に県北（日出町と杵築市）、秋に県南（佐伯市と津久見市）と年度を跨いで二回実施しました。

先ずは春季に行なった日出・杵築研修ツアーです。

三月二十六日・快晴・温暖。由布市のマイクロバスで九時に挾間庁舎を出発、参加者は総勢十四名ですが途中別府から矢島さんと衛藤さんが合流。最初の訪問地・日出町に入り、帆足万里図書館駐車場

に着く。

ここで今回の総合案内役を引き受けて頂いた梅野敏明さんが杵築から合流して全員揃い、梅野さんから本日の全体行程の説明を受けた後、日出城周辺の見学スタート。最初は、この駐車場の一角にある隅櫓・鬼門櫓（移築復元したもの）に入館して資料を見ながら説明を受ける。

この鬼門櫓の特徴は鬼門とされている北東の角を隅切りしている（控えている）こと。この形が残っているのは全国でここだけだそうです。

説明の途中から日出町に住む杵築史談会会員の魚住修三さんが到着、ここから先の説明をして頂く。魚住さんは二宮会長の大学先輩で同じ児童文化部出身だそうです。

次に深江地区に移動。

深江港は奥深く襟の形に似ており水深があり江戸時代、日出藩主の参勤交代の際にこの港から出発し江戸を目指したと言う。茶屋・襟江亭は、その深江港に面して現存しており、船出の際の風待ちとして利用され、珍珠の森藩・久留島公、府内・松平公などもこの港と襟江亭を利用、長い時は一ヶ月近く風待ちで逗留したこともあるそうです。全国唯一の現存する「風待ち」茶屋ですが瓦葺平屋建て、間取りは八畳の座敷十二畳の居間を中心に炊事場や家来控室、雪隠、湯殿などが配置されていたと資料にあり、現在もほとんどそのままです。

次に大神地区にある回天神社に移動。

住吉神社境内に建てられたトタン葺の社殿は、住吉神社の末社として登記されています。回天の模型と九三式魚雷機関を奉納。千七十三柱の戦没者の霊を合祀しています。例祭、例大祭があり、大神回天会が回天の歴史を守り伝えていきます。ここは訓練基地でした。

午後は、現杵築中学校横の杵築民俗資料館を見学。ニタリクジラの骨格の一部とカブトガニの標本が玄関で我々を迎えてくれる。その奥の展示室には昭和初期の農機具、漁具、鉋や鋸や大八車など多数の民具が陳列してあります。

次は木付氏の杵築城に向かいます。城の呼称が「木付」から「杵築」に変わったのは松平三代目の藩主・重休の時です。昭和時代に造られた模擬天守閣からは遠く佐賀関の煙突も見えます。

見学の最後は、杵築城の前身・竹ノ尾城跡です。杵築城から駐車場に戻り、バスに揺られること十数分、鴨川地区の山上に竹ノ尾城址があります。この城は大友親重が一二五〇年に造った山城ですが今は跡形もありません。残念ですが足元が悪く途中から引き返しました。

続いては、十一月十日に実施した佐伯研修ツアーの概要です。

総勢十六名でバスに乗り挾間庁舎を出発、佐伯市内では城山の麓に位置する養賢寺前の駐車場を下車、歴史の町並木通りを散策して汲心亭や国木田独歩館に立ち寄りながら佐伯市歴史資料館に到着、館内で佐伯史談会会員から説明を受ける、昼食の後、午後は平和祈念

館やわらぎ、津久見市に移動して宗麟墓地を見学しました。

(編集子)



佐伯市・養賢寺前にて